

番外編

「働く」女性 温故知新

勤労者だった70代の女性5人にインタビューをしました。
 街中でお店を営んでいる女性2人(40・50代)にもインタビューしました。
 昭和30年代から現在の「女性たちの働く」を尋ね、これからのヒントに。
 ※70代の方は1934(昭和9)年から1943(昭和18)年生まれです。

鹿内文子さん(再就職) 昭和時代には男女差を感じた。人権が尊重される街に。

就労期間	退職の理由
①昭和30年～42年(一般企業) ②昭和55年～57年(県の機関) ③平成4年～10年(自営業) ④平成12年～15年(市の機関)	①夫の転勤 ②有期雇用 ④有期雇用
Q職場における男女差を感じたことは？(○囲み数字は「就労期間」に同じ) ①仕事前に出勤。机の拭き掃除、トイレ掃除は女性の仕事。昇給時における男女の賃金格差。 ②来客へのお茶接待は女性の仕事。これは①でも。 ③④では差を感じることはなかった。	
Q家庭と仕事の両立は？ とにかくがんばって両立させていくしかなかった。病弱だったので、仕事の継続は悩んだ。夫や家族の協力で乗り切ったので感謝している。実母(同居)の介護との両立もあり、苦勞した。当時も、育児休業や介護休業があればもっと働きやすかったと思う。	
Q家事の分担は？ ほとんどは自分がやったが、体調の悪いときには夫が全てやってくれた。食事の支度も同様だった。	
Q子育てはどうやって？(○囲み数字は「就労期間」に同じ) 産後の休みを多くとりたかったので、産前はぎりぎりまで働いた。①の職場時に、3児の出産・育児をした。民間の保育ママと、保育所を利用。子育ては夫と協働した。	
Q息抜きは？ 職場のレクリエーション(旅行・運動会)、演劇活動、歌声喫茶、ママさんコーラス、読書	
Q仕事を続ける原動力は何だった？(○囲み数字は「就労期間」に同じ) ①②ゼロからの出発だったので、経済的基盤の確立に向けて努力した。 ③夫の仕事への協力。 ④男女共同参画社会の構築、日本女性会議開催のため。	
Q後輩女性や男性、社会に伝えたいことは？ お互いに思いやりを持つこと。個人が幸福でなければ、社会の幸福はあり得ない。安全・安心、人権が尊重される社会でありたい。	

Qどんな街になったらいい?

いろいろな人を包み込むやさしい街、笑顔の街に。

釜沼テイさん(再就職) 「自分を成長させたい」で生きた日々。それが仕事につながった。

就労期間	退職の理由
①20歳(短大卒)から3年間(幼稚園の先生) ②昭和42年~43年 興味しんしんで生命保険や化粧品のセールス ③昭和43年から2年くらい…小児科病棟の調理場(栄養士の資格があった) ④夫の死去(昭和47年夫36歳、私33歳)後、銀行に誘われて就職。ただし2年間は嘱託。その後正社員で50歳まで。 ⑤専門学校講師など	①夫の転勤 ③夫の転勤 ④体調。また母の看護も。
<p>Q職場における男女差を感じたことはありますか。(○囲み数字は「就労期間」に同じ)</p> <p>②③④社会全体が女性に対する評価が低かった(職場に限らず家庭の中でも)。 夫の転勤で行った函館で、銀行の社宅では働く妻のいなかった時代。しかし、お茶のみだけで過ごしては時間ももったいない、何か資格を取りたいとも思っていた。ある日、新聞の求人欄で仕事を見つけた。時給100円で3時間(豆腐一丁10円の時代)。当時(昭和42~43年頃)、「パートタイマー」という言葉が使われ始めた頃で、目新しかった。それまでは、女性の仕事というと、生命保険の勧誘や化粧品販売だった。夫には内緒。3時間なので見つからなかったが、1年ぐらい経って「日曜も出てほしい」と言われて日曜出勤をするようになり、夫にバレた。そのとき、夫から「子どもをないがしろにしない」「時間」などの条件が提示され、それが守れたら続けてよいと言われた。それから2年後、夫が突然の病死。1ヵ月後、夫がいた職場に、電話交換手として採用された。ようやく慣れた頃、契約書を見て嘱託であることに気づいた。 5年後、初の女性営業職第一号の命を受けた。そのとき、「お前が失敗すれば、次はない。あくまでもテストケース」とトップに言われ、すごい責任を感じた。 給料や昇給など、男性優位はいろいろあった。当時は、女性が出産すれば「あなたの席はない」と言われた時代。しかし、通告されてもゴザを敷いて座り続け「辞めない」と言った女性もいた。彼女は定年まで働いた。</p>	
<p>Q家庭と仕事の両立は?(○囲み数字は「就労期間」に同じ)</p> <p>④辛かったのは営業になってから、「時間」。帰りが遅い。営業には、帰社してから一仕事がある。特に、月末や年度末は残務整理で遅くなる。8時までの残業は普通だった。「女性は5時退社」の決まりがあっても、役職があればそうしてられない。小学生の子ども二人で私の帰宅を待っていたが、実家も近く、親戚も周りにいたので、安心できた。近くに誰かがいることが安心になる。</p>	
<p>Q家事の分担は?(○囲み数字は「就労期間」に同じ)</p> <p>④娘2人は小学生だった。高学年になればやれるもの。私は豆腐の値段もわからなくなっていたが、娘は覚えていた。</p>	
<p>Q息抜きは?</p> <p>親友とランチなどに出かけること、おしゃべりすること。職場の悩みなどを話し合った。</p>	

Q仕事を続ける原動力は何だった？

◇「子どもを育てる」ことと、「自分を成長させたい。今、ここで、足を止めてはいけない。まだまだ」という思い。夫が存命中から通信教育を受けるなど、「こうしてはいられない」という焦りや職業意識が常にあった。

◇大家族の長男の嫁で、お姑さんは厳しかった。できないことをやれと言われたら、やってみようと思っただけ。いつか自分のためになると思った。逆だったことはない。これは、仕事にも通じる。我慢することはマイナスになる面もあるかもしれないが、何かになる。苦労は買ってでもしろ、は本当だ。

Q後輩女性や男性、社会に伝えたいことは？

◇資格を持っていることが活きた。資格を取ったことで、変わった。調理場で働くパートのときは栄養士。次は衛生管理者。実は管理栄養士になりたかったが、テレビで「衛生管理者」(国家資格)の講座が開かれることを知って名前が似ているからやってみようと思っただけで自費で受講。国家試験に合格した。その後、社内で資格を持っている男性が転勤になり、資格保有者がいなかった(50人以上いる職場には衛生管理者が必要)。男性たちには会社が社費で受講・受験を勧めていたが、勉強が大変なのと、多忙の理由で、受講・受験した男性があまりいなかったらしい。これで、「衛生管理者」のポジションが与えられた。入社2年後正社員として、4~5年電話交換手と兼務した。

◇青森の銀行で初めて、女性で営業(外回り)。女性の営業職は全国的に見ても、いなかった。全国銀行協会の研修で沖縄から青森の34~35人に出会ったが、私が第一号だったようだ。「他行に先駆ける」姿勢の銀行で、いち早く女性営業職を取り入れ、そのとき、支店長が私を決めた。「なぜ交換手から？」という声もあったようだが、支店長が仕事ぶりを認めてくれていたのだろう。顔の見えない交換手の仕事から顔の見える対応へ。4~5年電話で対応していれば、声でどんな人かを把握できる。それが役立った。そして、外に出たことで、前が見え、変わってきた。人とのつながりが大きな財産。お客様の口コミで仕事が広がり、講師のオファがきたのもそこが大きい。

◇50歳で退職し、自分には何ができるかを考えた。これから、本格的な私の仕事。集大成として何ができるか。生きがいとしてやりたいことは何なのか。中学教師の免許や、やってきた講師の仕事から、そういう仕事が向いていると思った。図書館で調べ、ひらめいたのが、営業時代に講義を受けた男性講師のこと。よく当てられた。ヒントを得るため電話して、東京で会ってもらえることに。一緒に全国展開の仕事に取り組もうと誘われたが、青森で一人でやると回答した。受講の姿勢が後々影響したということだったのか。

◇だから、若いときの忍耐は必要と思う。また、過去が自分を強くしたとも思っている。反面教師に出会うのも、学ぶことと思ってほしい。社会というより、その前に大事なものは、自分が社会の変化にどう耐えていくか。置かれている場は一人ひとり違う。過去に培ってきたものも一人ひとり違う。変化に対してどう生きていくか。最後は、自分自身だ。

Qどんな街になったらいい？

少し、青森市は弱体気味。活気がない。

高齢者への情報が、高齢者に届いていない。高齢者住宅や高齢者向けの情報を、うまく出してほしい。街中に、飲食もできて自由に集えるフリースペースがほしい。

Aさん(再就職) 出て行かないと、何も始まらない。

就労期間	退職の理由
①高卒～結婚(一般企業) ②昭和62年～平成6年 子どもが大きくなったので。1年更新の臨職(県の機関)	①結婚後、夫の転勤で ②父の看病のため。すぐ亡くなってしまったが再就職はせず、市の女性リーダー研修などに参加した
Q職場における男女差を感じたことは？(○囲み数字は「就労期間」に同じ)	
①お茶いれとかもしたが、若くて下っ端だったので、考えなかった。 ②行政の出先機関でもあり、女性が多かったから、男女差は感じなかった。	
Q家庭と仕事の両立、家事の分担は？	
②のときは子育てもだが、家事のほとんどは私。でも、残業はなく早めに帰ることができる職場だったので負担はなかった。食事は手作りだった。	
Q息抜きは？	
特別なし。苦しさはなかったし、仕事が性に合っていた。	
Q仕事を続ける原動力は何だった？	
2回目の就職は、大学講座を受講したことから拓けた道。	
Q後輩女性や男性、社会に伝えたいことは？	
本人の気持ちが第一。出て行かないと、何も始まらない。仲間作りでも勉強でも、仲間との学習会でも。若い人たちは働いている人も多いが、家庭にいるだけの人もいて、もったいない。	
Qどんな街になったらいい？	
気軽に集まれる場所が街中であつたらいい。年代を超えて、交流ができる。情報交換ができる。バス停などでも積極的に話しかけるようにしているが、年代を超えて交流することで伝えていけることが多い。	

Bさん(再就職) 採用・賃金、感じた差別。目的を持って働く。働くことで広がった世界。

就労期間	退職の理由
①18歳(昭和29年)～36歳(一般企業) 3年休んで再就職 ②40歳(下の子が小5。上の子が中学)～50歳 (保険のセールス) 再就職は、官舎生活なので外へ出たかったから。また、専業主婦がなじまなかったから。	①夫の転勤。子ども二人を抱えて勤めていたので休みたかった。 ②50歳になったので、自分の生活をしたかったから。夫の転勤もあり(単身赴任はさせられず)。辞めてからは、社会活動や学習に出まくり、モニターも。楽しかった。
Q職場における男女差を感じたことは？(○囲み数字は「就労期間」に同じ)	
①同い年の男性の給料は上がるのに、女性はそう上がらない。女性が長く勤めるのだったら公務員だと、つくづく思った。女性の超過勤務は認められていなかったので残業なし。5時になれば退社。退屈だった。あの頃はつまらない仕事ばかりさせられた。女子給仕がいたが、「女性の仕事」が決められ、お客さんが来たらコーヒーやココアを出す、出前を取りにいく(運んでくれなかった)、お歳	

暮時期など品物を包むなども。

就職時、女性の採用はなく、臨時で3年間。卒業式の翌日から働いた。月給は5,000円だった。3年経ったら女性の本採用試験が行われ、高卒と臨時と一緒に採用試験をされた。面接で、「仕事は忙しいですか」と聞かれ「忙しいです」と答えたら、「要らない仕事をしているから忙しいんだろ」。

「要るか要らないかを選ぶ権利は私たち(臨職)にはないんです。社員から言われたら、拒否できないのです」と答えた。採用された。正社員になったら、給料がアップ。そのとき、「正社員じゃなくちゃな」と思った。

昭和40年代になると、社会で機械化が進み、給与計算などにも機械を使うようになった。そのため、女性も泊りがけで研修に行かされるようになった。研修では男女年齢関係なくできない人は残された。女性の仕事が簡単なものから、給与計算や経理まで広がった。男性もそれまでは暇だったように思う。高度経済成長に入ってから、忙しくなったような気がする。

Q家庭と仕事の両立は？(○囲み数字は「就労期間」に同じ)

①大変だったのは、子どもが病気をしたとき。上司に「子どもを病院へ連れて行きたい」と申し出ると、「仕事はどうするんですか?」。時間休を取って、職場に戻って仕事した。しかし、女性は5時以降働けないので、男性が残ってやってくれた。

Q家事の分担は？(○囲み数字は「就労期間」に同じ)

①昭和30年代、今のようにおかずを売っていなかったので、すべて手作り。全部自分でやらなければならなかったのが、大変だった。おむつは紙おむつはなかったから、出勤前に洗濯していた。夫が朝保育所に連れて行ってくれたり、病院へ連れて行ってくれたりしたが、男性は夜遅くまで働く時代だったので、家事の時間は取れなかった。日曜日には煙突掃除などをしてくれた。

Q子育てはどうやって?

産前産後6週間から8週間の休みだったかしら。保育所はすぐみつかった。

保育所へは朝は送っていったが、帰りの時間には間に合わなかったのが、自費で迎えのおばさんを頼んだ。そのおばさんの家に子どもを迎えに行った。

昭和41年ごろまで電話がなかったから、子どもが夜に熱を出すと、往復15分かけ公衆電話に走り、タクシーを呼んだ。家に電話がついたときは、感動だった。

Q息抜きは?

夢中だったので、なかったかな。たまに、子連れでむつから青森へ買い物に来て、「ナイトー」で買い物をしたのを覚えている。デパート内のレストランや、芝楽がお食事どころ。

家族旅行も息抜きだった。奮発してグリーン車で、札幌の動物園に行ったことがあるが、子どもが騒ぎ、帰りは普通車にした。

Q仕事を続ける原動力は何だった?

働く目的3つを決めていた。

1.自分が大学へ行けなかったのが、子どもを大学へ行かせること

2.自宅を建てること

3.老後、年金をもらって、裕福に暮らすこと

この目的が定まっていたから、ぶれなかった。

臨時で働いていて悔しい思いもしたし、辞めたくもなったが、「これまでがんばってやってきた。い

つか女だって採用されるときが来る」とがんばった。上司が変われば変わることもある。

Q後輩女性や男性、社会に伝えたいことは？(〇囲み数字は「就労期間」に同じ)

女性たちは、絶対に仕事を辞めないで勤めてほしい。主婦だけの人生はつまらない。社会の一員として、企業とかの体質も経験しないとわからない。また、①では見えなかったことが、②の保険のセールスで見えた。視野が広がり、世の中を知った。

再就職の10年のおかげで、いただく年金が増えました!

女性も難しい仕事はしたくないと拒否しないで。それは甘えだと思う。チャンスがあったら、どんどんがんばってやってほしい。やる気をもっともって出して。

共働きの家庭で育った息子たちは夫も妻も働くことが普通だと思っている。しかし、一人の息子の職場では「妻は家庭に入るもの」の風潮があって、彼女は辞めた。孫の女の子たちは理系女子。理系女子であり続けてほしい。

若い方へ…死ぬときに悔いがなかったと思えるように、今をしっかり生きて。若いうちでなければできないこともあるので、仕事でもプライベートでも生きてほしい。

Qどんな街になったらいい?

あちこちにデイサービスセンターや老人ホームができています。そこと保育園との交流がもっとあったらいい。

Cさん(継続勤務) 仕事を前向きにとらえる。落ち込まない。仕事は楽しい!

就労期間	退職の理由
①20歳(短大卒)～定年(公務員) ②延長	①定年 ②任期終了

Q職場における男女差を感じたことは?

共働きで「夫が部長になる」とときには、有能な妻が退職していった。また、女性の昇進のとき、「妻の方がポジションが上になるなんて、家庭を壊す気か」という発言が多かった。

「男性が上」とされていた時代で、女性にはやらせてもらえない仕事がある時代だった。「お手伝いしましょうか」と持ちかけて(男性のプライドを傷つけない)、仕事を盗み、仕事を覚えた。仕事をいとわず積極的にすると、仕事が覚えられて、おもしろかった。お茶汲み、掃除をして、仕事もできるだけやって、男性の2倍は働かないと、女性は決定権のある場所には進めなかった。私たちの頃には、女性がリーダーになるように育てられなかった。

Q家庭と仕事の両立、家事の分担は?

シングルマザーだったので、残って仕事をするのは難しく、持ち帰って仕事をした。仕事は遅れないようにした。

一方、シングルマザーだったので、思いっきり仕事ができただけかもしれない。

Q息抜きは?

子どもが育ってからは、金曜夜に飛び出し、奈良・京都を旅行、月曜朝に帰青して職場にまっすぐとか、東京で能を観るなど、自分にご褒美をあげた。

Q仕事を続ける原動力は何だった？

親が、男・女にとらわれない育て方をしてくれたからかもしれないが、与えられた仕事を前向きにとらえた。関わった人によって、職場は変わる。変えることがおもしろかった。掃き溜めでも、私に関わることで変えよう。書類の間違いもなくそう。めげない、落ち込まない。そのためにもリフレッシュは大事。貯金は残らなかったけれど。

Q後輩女性や男性、社会に伝えたいことは？

男女がお互いに甘えることなく進んでいったら、平等になれるかな。
男の子を育てる人は、生活者として自立するように育ててほしい。愛するなら、夫を自立した生活者にしてあげて。

Qどんな街になったらいい？

「男女共同参画都市」宣言の実現を。宣言したことが女性の進出を促したと思うし、若い女性が昇進しているのを見るとよかったと思う。
新町をもっと元気に。

田中恵(めぐみ)さん (有限会社リケン洋食器店役員 50代)

私の代でつぶせない。街があつてこそ。

就労期間

大学卒業から今に至る。父母が経営していた店を引き継いだ。

Q家庭と仕事の両立は？

父母の姿をずっと見てきたので、つらいことはなかった。結婚して子どもができてからは、少し大変だった。でも当時は、父母が元気だったので甘えられたし、夫の父母も健在で、子どもの面倒をみてくれた。

小さな企業だからこそ、介護・子育てについて細かく時間差攻撃策(?)などを使い、やれることはやっていきたい。知恵と力をだしあつて。

Q家事の分担は？

夫が家事を好きで、ゼーンぶやってくれることも。これからダンナサマになる方はご理解を！
私は新町の店、夫はサンロードの店と、こちらも分担。同じ仕事をしているから話はわかる。隠し事もできないけれど…。

Q子育ては？

子どもは3人。保育所がなければ、仕事を続けられなかった。助かった。

Q息抜きは？

家族とリフレッシュ。家族みんなポジティブなので…、お店が終わってからドライブに行ったり映画を観たり。親子でゴニンカンをしたりも。

Q仕事を続ける原動力は何だった？

商店街に属し、地域のために一生懸命やってきた両親を見てきたから、「自分の代でつぶせない」と、負担ではなく、前向きに思ってきた。自分たちの店があっただけではダメで、だから一生懸命まちづくりにも取り組む。

Q後輩女性や男性、社会に伝えたいことは？

刃物屋だから言えるのかもしれないが、いい技術や文化は、商店街や専門店があるから残っている。今、いいものが廃れていっているところがある。安いものがいっぱいあるけれどそれだけではなく、本来のいいところを思い起こして生活を考えればよくなっていくと思うし、そうしないともったいない。3.11で電気がなかったとき、大変だった。今は、生活の仕方などを考える時期なのでは。

Qどんな街になったらいい？

観光客は、青森の空気がおいしい、水がおいしいとおっしゃる。そこはなくしたくない。「雪がなければ…」と言う人もいるが、雪があるからおいしい水が飲めるし、四季折々を感じられる。

地震の後、出産のために来青した方に何人か出会っているが、「青森の方はやさしいですね」と言われた。東京からいらっしゃる方は、おもしろがってお買い物をしてくださり、「暮らしやすいですね」と。私は青森は暮らしやすいと自負している。

年配の方々は「新町は青森市の顔」と思ってくださっている。がんばろう。商店街にいらしてください！それから、食生活を、みんな、もうちょっと考えよう。そして、短命をなくそう。

高谷晃子(てるこ)さん (喫茶クレオパトラ店長 40代)

男女差別を感じたことはなかったけど。

就労期間

祖母が副業として始めた店を継ぐために学校に行き、卒業と同時に店に関わった。店長になり15年。

Q男女差別を感じたことは？

職場以外も含め、男女差別を感じたことはない。

Q「女性の視点」という言葉が使われるが、その点は？

今まで、「男性・女性」とあまり見てこなかった。でもそういえば、メニューには男性では思いつかないものがあるのかも。美と健康を追求するものが入っていますよ。

Q息抜きは？

サークルで楽しむこと。

365日開店している。年末年始もなく休日なしだが、商人の家に生まれ両親を見てきたからだろうか、休めないことを苦に思ったことはない。逆に、週休二日の方々はお休みの日に何をされていらっしゃるのかと思う。

Q仕事を続ける原動力は何だった？

お客様に喜んでいただいたとき。7時開店も、お客様にすてきな朝のひとときを過ごしていただきたいから。年配の方に「一人でも安心して来られる店」とおっしゃっていただけるのも嬉しい。がんばります。

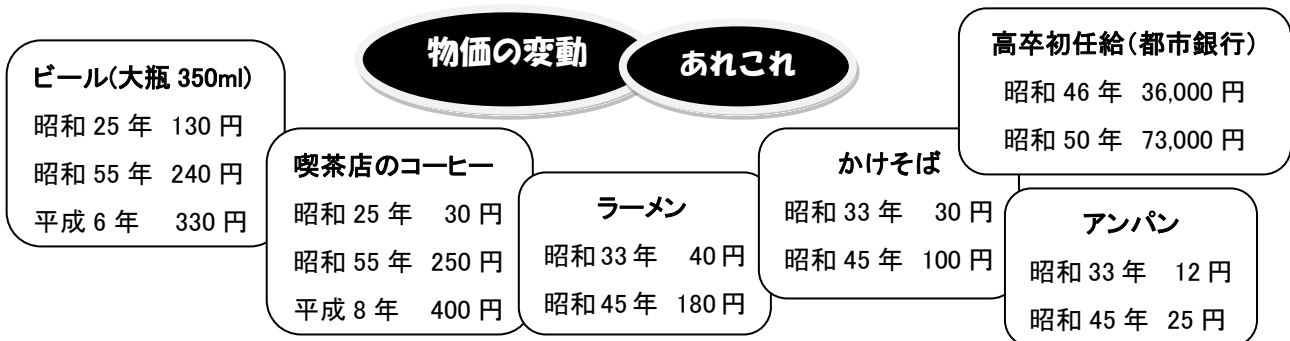
Q若い人に向けて思うことは？

若い人のやる気を引き出してあげるにはどうしたらよいかの勉強をしてみたい。やる気が入ってきた若い人の芽を摘むことのないように。

Qどんな街になったらいい?

青森の街は変わり果てたと思う。郊外にお店ができたのが要因だろうか。松木屋さんがなくなつての変化は想像以上だった。今の若い人は歩くのを嫌がり、お店の前に駐車場があることを求める。新町に駐車場はあるが、あると思えないみたい。

「こんなに悲しいときに、なぜ仕事をしなくてはいけないの?」という状況にあったとき、新町のみなさんが励まし叱り支えてくださった。つながりがあるからしていただけたこと。大事にしたい。新町に来てください!!



インタビューを終えて 館長の視点

たまたまだったのかもしれませんが、勤労者 5 人のうち 4 人の方が、日本女性の象徴的な働き方(子育てで退職し、子どもの手が離れる頃に再就職する、いわゆる M 字型カーブの要因となる働き方)をしていました。また、それだけでなく、4 人全員が夫の転勤で仕事を手放していたのです。

夫も妻も勤めている場合、どちらかの転勤は、二人の生活にどう影響していくのでしょうか。夫婦だけなら週末婚も新鮮かもしれませんが、子どもがいるとそうもいかないでしょう。どちらが、辞める? それはどうして? 転勤について何か対応策は?

また、仕事を続けるには保育所(園)が必要だったこと、その上に、保育ママや周囲の支援なくしては難しかりょうことが読み取れます。

強烈な印象は、男女雇用機会均等法以前の時代、家庭責任は妻にある*とされていた時代、女性たちがいかに悔しい思いをし、しかしそれをはねのけてがんばったかでした。「ここまですたくない」女性たちもいるでしょうが、先輩たちが実践し勝ち取ってきた歴史を後輩たちは知ってほしいと思いました。仕事に向かう姿勢も参考にできると思います。

自営業のお二人は二代目さんでした。新町に育ち今責任ある立場にいらっしゃるお二人に共通するのは、「繋ぐ」「見直す」「進む」のように思いました。

私たちの「これから」を創るには、意見やアイデアの出し合い、協働が欠かせそうにありません。

※ILO 条約で家庭的責任を持つのが「男女労働者」になったのは 1981 年採択の 156 条約でした。それまでの 123 条約では女性にのみ家庭責任が求められていました。